



鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第114号

2021年11月1日

速報!!

来年度総会は6月11日(土)・12日(日)に秩父で

シンポジウムテーマは「社叢と地域コミュニティ」

見学会は三峯神社から武甲山、秩父今宮神社へ

詳細・申込みは来号以降に発表!

神社新報連載 近く始まる

社叢に関する情報・現状・管理の考え方などを網羅

神社新報(神社新報社発行・週刊)の連載がよいよ今月にも始まる。口火を切るのは藺田稔理事長で、その後、ほぼ1年間にわたり、これまで当学会が様々な機会をとらえて情報提供し、主張してきた種々の主題を網羅、それぞれの第一人者である当学会理事などが執筆を担当する。今後、社叢に関する疑問や管理上の悩みなど、取り上げてほしいテーマがあれば、お知らせいただきたい。

購読申込方法は右記の通り。なお、年間購読を原則としているが、必要な号1部のみ購入も可能。また、冒頭部分を、神社新報社ウェブサイト「記事」欄

で、発行から1カ月限定で読むことができる。

購読申込:電話(03-3379-8212)、郵便(〒151-0053 渋谷区代々木1-1-2)、FAX(03-3379-8213)、インターネット(<https://www.jinja.co.jp/kodo-ku-kiyaku.html>)にて

発行日:月4回・毎週月曜日発行

購読料:1年間 8,040円(10%消費税込)

支払方法:郵便振替(申込者に用紙を郵送)

支払期日:初回新聞到着後20日以内

購読の開始:購読申込の翌月最初の号

問合せ先:神社新報社(連絡先は上記)

原稿募集中!

「鎮守の森の活動報告」(祭、音楽会、調査、ワークショップなどの実施報告、抱える問題など)や各地の「社叢訪問記」(各1,200字程度)の投稿締め切りは12月24日(金)必着です。

お気軽にご投稿ください!

* 書評欄では会員の皆さま方の著作を取り上げています。出版された方は、ぜひご献本下さい

東日本大震災社叢復興支援事業報告書を発行

8年間の全てを記録 現地調査員の生の声も 頒価 3,000円

今回の賛助会員神社社叢紹介は、賀茂別雷神社(上賀茂神社)を取り上げる。賀茂別雷神社は2019(令和元)年7月の関西定例研究会で、神社の由緒などについては田中安比呂宮司から、境内の植物については松谷茂・京都府立植物園名誉園長)から詳細な説明を頂いた。今回はこの研究会報告を抜粋して掲載する。なお、全文は「鎮守の森だより」101号(2019年9月1日発行)・102号(2019年11月1日発行)に掲載している。

賛助会員神社の社叢

賀茂別雷神社 かもわけいかづちじんじや



境内のモッコクと社叢遠望

賀茂別雷神社

賀茂川東岸に鎮座。京都最古の歴史を有する。かつてこの地を支配していた古代氏族である賀茂氏の氏神を祀る神社として、賀茂御祖神社(下鴨神社)とともに賀茂神社(賀茂社)と総称される。伊勢の神宮に次ぐ社格を持ち、平安遷都後は皇城の鎮護社として、京都という都市の形成に深く関わってきた。賀茂神社両社の祭事である賀茂祭(通称 葵祭)で有名。古事記に創建の神話が記載されている(101号参照)。

所在地：京都市北区上賀茂本山339

祭 神：賀茂別雷大神(玉依比売命(賀茂御祖神社祭神)の御子神)

陰陽思想 境内には陰陽思想が息づいている。細殿前の立砂は神が降臨した神山をかたどっており、右が陰(偶数)で二葉の、左が陽(奇数)で三葉の松葉が飾られていて、一対で一つの山を表している。最大の陽の数が重なる9月9日の重陽には立砂の前で鳥相撲が奉納される。鳥に扮した地域住民が二手に分かれ、鳥をまねてびよんびよんと飛び、一方はかーかーかと、他方がこーこーこーと鳥の鳴きまねをする。境内の土俵では子供相撲大会が催される。

葵祭 6世紀、欽明天皇の代に始まった葵祭は今は5月15日に斎行されるが、先立つ12日の夜8時に神山と

の間の御阿礼所で神を迎える秘儀を斎行する。15日の社頭の儀では宮中からの勅使が朱塗りの祭文を奏上するが、朱色の紙を使うのは賀茂社だけのことで、祭りのめでたさを表している。奏上された祭文は宮司が磐座をかたどった石の上で祝詞をあげて神に伝える。近隣の住民も軒先に葵を飾って祭りを楽しんでいる様子が絵図などにも見える。源氏物語にもあるように、時には陣取りの争いも起こる程、葵祭は賑やかで大切な祭りであった。

葵祭で特筆されるのは平安時代からの形式を受け継ぐ神饌で、神殿内に供える「内陣神饌」「外陣神饌」に加えて、神殿の前庭に全国から集まる神のために葵祭独特の「庭積神饌」が、山海の産物を小皿120枚に盛りつけて供される。

全ての神事が終わり夕闇が迫る頃、御殿に向かって、さらに御殿裏から神山に向かって馬を走らせる走馬が斎行される。5月5日の競馬(くらべうま)は今の競馬の発祥とされている。そのため、通常であれば社叢である所が馬場を確保するための空間になっている。

徳川幕府とのつながり 両賀茂社の神紋は双葉葵だが、葵は「あふひ」で、「ひ」は火や陽など神聖なものを表し、「神に会う」意がある。1本の根から必ず2本の茎が出ることから神との縁を結ぶ意もある。徳川家は出身地である三河の分霊社に深い信仰を寄せており、神社からも、関ヶ原合戦以降、駿府に、後には江戸に葵を届けていた。こうしたことから神紋をアレンジして三つ葉葵の家紋を作ったのだと思われる。

本殿と権殿 建物で特徴的なのは本殿の横に全く同じ構造の権殿を持つことだ。これは本殿に何か事があればすぐに神を移すための建物で、権殿があるのは上賀茂神社だけだ。ここでも21年目に遷宮を行っているが、現在の本殿・権殿は国宝に指定されているために、建て替えることができない。そのため檜皮の葺き替えなどの修復で遷宮にかえている。この檜皮についても、100年後を見据え、ヒノキの植樹を実施している。

賀茂別雷神社の境内の樹木

ツガ<マツ科>：樹高が高く、花や葉を間近でじっくり見る機会がない。これも隣の木とのバトルの結果だろう。松かさができるものはマツ科で、ヒマラヤスギもスギとはいうけれどもマツ科だ。ツガの種は松かさの鱗片の付け根にあるが、ここにも生き抜く戦略が秘められている。

ヒトツバタゴ<モクセイ科>：月光椿の横にあって「ナンジャモンジャノキ」と呼ばれるものの正体。花が咲いていないと、なかなかその存在がわからない。「ナンジャモンジャ」についてはトチなどをそう言われることもあるが、大筋にはヒトツバタゴとされている。

ヤマボウシ<ミズキ科>：国産で果実ができる。ハ

ナミズキ(アメリカヤマボウシ)は北米原産で、街路樹として植えられ増えている。違いは花・果実で、ヤマボウシの果実はイチゴのようで可食。とはいうものの美味しいものに当たったことはない。ちなみに花びらに見えるのは苞葉でヤマボウシのものは尖っている。開花時期も違い、ハナミズキは4月でヤマボウシは6月。

オガタマノキ＜モクレン科＞：神社でよく見る。その木を目指して神さまが降りるといって招霊木といわれる。成長が早く、高木になるので花をのぞき込んで観察することができない。オガタマノキの隣にトウオガタマがあるが、唐とかカラとつくのは中国原産であるサイン。花はバナナの匂いがするのですぐにわかる。カラタネオガタマとも言うが、種ができるのは見たことがない。

メタセコイア＜ヒノキ(スギ)科＞：この木があるのに驚いた。落葉する針葉樹で、葉はヌマスギとよく似ている。日本で落葉の針葉樹といえばカラマツが多い。メタセコイアは対生だがヌマスギは互生。枝も対生でじっくりと見ているとなんとなくわかるが、色々見ていると曖昧なものもある。鈴のような実ができる。

ちなみにヌマスギは沼にしかはえるニッチがない。京都府立植物園では花菖蒲園の横にあって、地面から根を出す気根を見ることができる。

モッコク＜ツバキ科＞：形がきれいで庭木には欠かせない。葉がつるつるで、葉柄の色に注目するとよくわかる。花の咲かない木はないわけで、モッコクにも目立たないがきれいな花が咲く。

ムクロジ＜ムクロジ科＞：枝先に特徴があり、落葉時期に観察するとわかりやすい。枝が込んでいところは鹿の角のようになる。葉の付き方は偶数羽状複葉。花は臭いが色々な虫が来る。子房は3室といわれるが、現実的にはなかなか3室揃っているものはない。果実は真っ黒で硬く、羽子板の羽の鍾になる。果皮にはムクロジサポニンが含まれており、水を加えてこすると泡立ち、石鹸ができる。社寺に植えられることが多いが、巫女が鬼を征伐するのに使ったという中国の伝説があり、以後、神社に多く見られることになったという。

エノキ・ムクノキ＜ニレ科→アサ科＞：科の分類が変わった。この両者は葉を見なくても木肌でわかる。エノキはつるつるで、ムクノキはある程度の樹齡があるとがさがさになる。境内の東に大きなムクノキがあるが、これは河川の氾濫原に生えるもので、人工的に植えたものではない。賀茂街道にはニレ科の大木が多い。葵橋近くには85年生くらいの大きなアキニレがある。昭和10年の大水害で賀茂川の大被害で多くの木が流れたが、御蔭橋改修の時に西のケヤキを伐採したので株本をもらって年輪を数えたら80+αとなった。ということはこの水害直後に生えたものだ判断できる。初期成長が良いのも特徴的だ。葉は鋸歯の出方が違い、ムクノキは鋸歯がある。多くの花が咲き、実は食べられるが美味しくはない。エノキには板根があり倒れない。

イチョウ＜イチョウ科＞：誰でも知っている木だが、境内にはあまりない。葉の付き方に特徴がある。短枝の先につき、長枝の先には出ない。これも太陽の光を受けるための戦略で、銀杏の赤ちゃんが上を向

いているのも同様の戦略だ。

北山杉：1本仕立ての床柱としての需要はなくなったが、地上部の直ぐ上から多くの枝がでる台杉は庭木として人気がある。

イチイガシ＜ブナ科＞：大きな個体が二の鳥居と三の鳥居の間にある。その年に出た枝の葉裏には黄色い毛があり、鋸歯がしっかりしている。どんぐりもできる。

ストロブマツ・テーパーマツ＜マツ科＞：共に北米原産。ストロブマツは五葉でテーパーマツは三葉。日本のアカマツ・クロマツは2葉で針葉が長いが、ゴヨウマツは葉が短い。世界では三葉と五葉のものが多い。

カゴノキ＜クスノキ科＞：河原によく見られる樹木で幹肌が鹿のような模様になっていることからこの名がある。常緑樹で、京都は北限に近い。

タマミズキ＜モチノキ科＞：これがあるのには驚いた。雌雄がわからないが、秋に赤い実をつけるのでその時期に確かめたい。八坂神社裏山にあるが、周辺の木が倒れたため、市内からでも見える。

タラヨウ＜モチノキ科＞：雌株で赤い実をつける。葉は大型の肉厚で長楕円形。裏側に硬い物で文字を書くとその跡が黒く変色し、葉が枯れても残るため「ハガキノキ」という別名がある。こうしたいわれから郵便局の前によく植えられている。

サカキ＜モッコク科＞：枝先がナギナタ状で、近くで見ると特徴がわかる。基幹が真っ直ぐで神が降りるのにふさわしいとされる。常緑で姿が美しいので「栄える」から「サカキ」となったという説もある。花は良い香りがする。

源氏物語に「賢木(さかき)」という帖があるが、ここで疑問がある。光源氏と六条御息所が交わした和歌に「…榊葉の香りをなつかしみ…」とあるが、サカキの葉に香りはほぼない。これはシキミ＜マツブサ科＞ではないのだろうか。ちなみにシキミは実に毒があり、「悪しき実」からシキミになったといわれる。シキミは仏事に使われる。

センダン＜センダン科＞：「梅檀は双葉より…」といわれる熱帯の樹木で花は紫でよい香りがする。おしべの中にめしべがある。実は硬く、数珠を作ることができる。

ナギ＜マキ科＞：神社に多く、雄雌異種の樹木。葉は楕円形で広葉樹に見えるが針葉樹である。

ツバキ「月光(がっこう)」＜ツバキ科＞：ヤブツバキ系。ツバキにはヤブツバキ系とユキツバキ系があり、花を見ると、しべが合着しているか1本1本かで見分けられる。

ヤブツバキは下北半島が北限でユキツバキは日本海側のみに見られる。園芸品種が多いが、欧米には分布しない。

御所桜・齋王桜＜バラ科＞：エドヒガンの枝垂れ品種。御所桜は根元が膨らんでいる。境内のサクラはいずれも美しい花を咲かせる。なお、サクラには様々な種類があるが、ソメイヨシノなどは樹皮に横ラインが入っており、幹で見分けられる。

フタバアオイ＜ウマノスズクサ科＞：連理木(何の木かわからない)の足元で育成している。地下茎で横に這って行く。罅片の先端が反っているのが特徴。

book book book book book book

海の京都・丹後の巨樹ものがたり

同書編集委員会

京都府最北端、丹後半島を中心とした地域の巨樹を紹介したフルカラー137頁の冊子。

一部「丹後の巨樹台帳」は、京都府立宮津高等学校と宮津天橋高等学校フィールド探検部が2千7百回もの現地調査を実施し、幹周300cm以上の樹木を16のエリアに分けて一覧表にまとめたもの。所々に配された風景や地域の催事の写真なども楽しい。調査を指導したフィールド探検部顧問による調査のまとめや丹後の社叢の歴史性・地域性を取り上げたコラムも読み応えがある。

二部「巨樹の表情」では37本の巨樹の写真を楽しいコメントとともに掲載、三部「里の『樹(ひと)』」では3人の住民がそれぞれの地域での暮らしやその思い出などを寄せている。四部「巨樹を訪ねる」ではエコツアーが提案されている。

それぞれ関わった人々の熱量が伝わる内容で、中でも高校生の調査成果には目を見張られる。

本冊子は非売品だが、国会図書館、京都府立図書館などで閲覧できる。

事務局から

- 10月22日(金)に理事会を開催し、来年度の年次総会の開催日時を決定いたしました。いよいよ2年越しの秩父大会の開催です。詳細につきましては、1月号以降、順次お知らせいたします。皆さま方におかれましても予防専一に、6月に元気なお姿をお見せ下さいませようお願いいたします。
- 関西・関東での定例研究会と社叢インストラクター養成セミナーを再開いたします。定例研究会は、関東では1月末に昆虫をテーマに、関西では3月にセミナーを兼ねての開催を検討

しております。中部は下記の通りです。会員であればいずれの研究会にも参加が可能です。詳細は次号に掲載いたします。ご参加をお待ちしております。

- 今年度の会費未納の方には振替用紙を同封いたしました。何かと多端な折とは存じますが、社叢学会は会費で運営しております。ご理解とご協力をお願い申し上げます。なお、12月末日までに入金の確認ができない場合は、「鎮守の森だより」等をお送りできなくなりますので、悪しからずご了承下さい。退会をご希望の場合は、会員番号とお名前をご記載の上、Fax・Mailでその旨、お知らせ下さい。

銀行振込も可能です。三菱UFJ銀行 京都支店 普通口座6720345 特定非営利活動法人社叢学会 理事長 藪田稔 です。

- 『社叢学研究』は20号の記念特集です。身近な活動報告と社叢を訪れた時の感想などを募集しています。「社叢訪問記」では、繰り返される自然災害の被災状況なども含め、どんなことでも結構です。ぜひお寄せください。

編集後記

昆虫がテーマかあ、関東定例研究会は。

去年、山椒の葉を混ぜた散らし寿司を作ろうと思って、苗を入手。アゲハチョウの卵や幼虫を放逐しながら若葉を美味しくいただき、秋になると葉もちょっと茶色っぽく。おっと、えらい大きくなった青虫がいるのではないの、見落としていたのか？ 若葉のお寿司はもうできないし、このまま放置しておいてやろうではないの。

で、日々観察していると。。。ある日、いなくなった！ 急に寒くなったからかなあ。どこに脱走したのだから。アゲハチョウの幼虫が地下に潜伏するって話は聞いたことがないしなあ。鳥かすズメバチかにやられたのかなあ。

子供の頃、アゲハチョウの青虫を飼っていて、思わず頭を撫でたらにゆるんって角を出されて(柑橘の匂いで臭くはないのだ!)ちょっとショック。はい、ワタシ、ちびっと虫女。。。 (藤岡 郁)

次回予告【第37回中部定例研究会】

- ◆日 時：2022年3月13日(日)
- ◆場 所：中山・神明社(田原市中山町宮脇本畑32 tel0531-32-2099)
- ◆スケジュール：13時～ 正式参拝と社務所での研究会
見学会は未定

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL・FAX 075-212-2973

URL <http://www.shasou.org> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp

社叢学会関東支部 〒368-0041 秩父市番場町1-1 秩父神社社務所内
TEL080-1514-5032 E-Mail shasougakkai@hotmail.com